

向坂先生の日々

川口, 武彦

<https://doi.org/10.15017/4362522>

出版情報 : 経済学研究. 26 (5/6), pp.457-465, 1962-04-25. 九州大学経済学会
バージョン :
権利関係 :

向坂逸郎先生の日々

川 口 武 彦

向坂逸郎先生に私をはじめしてお会いしたのは、昭和二十一年の春であったと記憶している。場所は先生の生地、大牟田の妹さんのお宅であった。

これにはこんなわけがあった。復員をした私は満洲の職場もなくなり、田中定先生のおすすりもあって経済学部の大学院に在籍していたが、そのころ向坂先生は石浜知行先生、高橋正雄先生とともに九大に復学された。そのとき向坂先生は福岡に移り住むことの不可能なこと、そこでいろいろの連絡の仕事をしてくれる人物はいないかということや田中先生にたのまれたらしい。そこで田中先生からそれについて私に御相談があった。実はそのとき私はいささか当惑をした。私は向坂逸郎という御名を知ってはいない。ことに中学の大先輩でもある向坂逸郎という文字は大分以前から同窓会名簿でみていた。その職業欄には著述業とかいてあったように思う。もと九大教授ということは知っていたが、もちろん大学入学まではそれ以外のことはくわしくは知るよしもなかった。田中先生からお話のあったときは先生について

すでにかなりの知識はもっていたが、お人がらその他についてはまだまだまったく知識をもちあわせなかった。私としては躊躇せざるをえなかったのである。そこで「一度お会いしよう」ということになり、田中先生に促って大牟田に先生をお訪ねしたわけである。

このとき先生は和服で端然としておられたことをいまもはっきり記憶している。私は両先生のつきないお話しをかたわらでうかがっていた。かけ出しの私にはわからない問題が多かったが、資本主義論争のお話しにひどく興味をひかれた。

思えばそれから十六・七年がたったわけであるが、まことに年月の経過は早い。

向坂先生が教壇に立たれたのは昭和二十一年の秋十月からであった。十一番教室は超満員で先生をお迎えした。ちょうど、先生の終講の日のあの十一番教室と同じように。そのときからの数年の講義が『経済学方法論』三巻におさめられたのである。

私もこの講義を聴講した一人であるが、いま、その後改訂された『マルクス経済学の方法』を読み返しながら、当時の講義の日々と、そのころ先生が『思想』に発表された「物神性の発見」の一文を読みふけた日の感激を思いおこしている。

先生の研究室で私たち助手や大学院学生たちの研究会がはじまったのもそのころであったと思う。この研究会は当初、『空想から科学へ』などの小冊子、あるいは資本主義論争関係の文献などを輪読したが、その後『資本論』研究会というところに、ついに落ちつくべきところに落ちついた。年移りメンバーも変ってこの研究会は先生の御退官までつづいたが、それに参加したメンバーは毎年、記念のアルバムに署名をしている。そのメンバーは大変な数にのぼるであ

ろうが、いま全国でそれぞれの学生生活を送っている。そしてみなこの研究会のいろいろの思い出を思いおこしていることであろう。このアルバムの第一頁に署名しているのは、おそらく都留大治郎、湯村武人、岡茂男、奥田八二、川口武彦などであろう。

この戦後第一陣について、つぎつぎと新鋭が参加してきた。松井安信、上村剛一、荒巻哲郎、竹村脩一、小野朝男、三戸公、別府正十郎、内田勝敏、稻生晴、宮本光重、小島恒久、寺園徳一郎などが第二陣であろうか。このうち宮本君は昭和二十四年春、不幸にも瀬戸内海で青葉丸とともに若い生命を失った。

この研究会が在京のグループの研究会とともにいわゆる向坂「寺小屋」を形成したわけである。

この研究会を先生は非常に熱心に指導された。集るメンバーは先生の熱意に押され気味であったともいえるのではないだろうか。熱心な諸君にはこんなことをいっておしかりをうけるかもしれないが、私にはそう感じたことがある。

こんなことがあった。それは昭和二十六年であったと思う。そのとき私はすでに大学院を卒えて、佐賀大学の教師になつていた。私はその研究会の当日にどうしても急ぐ仕事があつて出席できないと思つた。それでちようどその朝私を訪ねてくれた友人にそのむねを告げて、家で仕事をしていた。ところが私の家主の家にしばらくして先生から電話がかつた。なにか急用か、と思つて電話口に出たら、先生は「今日の研究会に出席されますか？」といわれる。私は「さきほど、今日は欠席させていただくと伝言しましたが」と御返事すると「うかがいました。今日は出席されますか」といわれる。私はまたその欠席の理由をのべて、おことわりした。ところが、また「今日は出席されますか」と同じ言葉が聞える。私の記憶では、この同じ言葉を、しかもそれだけの言葉を五、六回うかがつたように思う。そこでさすがの私ともたまりかねて「出席いたします」と答えた。というより、そう申し上げるよりほかに方法がなかった。

いまも、ときどきそのときのことを思い出しては、いまは一人の教師となつてゐる自分にそれだけの熱意があるかと反省させられる。

その日、その研究会がすんで天神町で大牟田に帰られる先生とお別れしたのだが、そのとき先生は私にこういわれた。

「がんばることをいいましたが、あなたにも研究会をもっと大切にしてもらいたいのですが、研究会の全員のためにも、そうしてもらいたかったです」

これは私のほんの一つの思い出であるが、この研究会にはみなそれぞれの思い出があることであろう。

二

向坂先生はまとめたお仕事は信州松本市外の扉（とびら）でされている。ひなびた山の鉱泉である。その宿の一室が先生の離れた書齋になつてゐる。つねづね使用される文献はこの宿におかれてあつて、いつでもそこにに行けば仕事をされる体制がととのつてゐる。

私たちもしばしばここにお邪魔をしてきたし、いまもいれかわりたちかわり出かけてゐる。海拔一千米をこえる扉の夏は別天地である。ここから一日行程の美ヶ原は文字通り美しい高原であり、放牧されている馬が広い高原をかけてゐる。桔梗が涼風のなかに咲きみだれている。

この扉で毎年全国の寺小屋のメンバーが集つて研究会をやり、美ヶ原に遊ぶ計画をたてたものである。だからあの年

の研究會、この年のハイキングはいまも私たちの話題にのぼる。「あの日は先生から大変な説教をされたなあ」とい
えば、不謹慎な言い方だが、そのお説教もなつかしい思い出の種なのである。

この扉研究會がまだはじまっていなかった昭和二十三年の夏であつたと思う。私は先生のおすすめでひと夏ここで御
一緒にくらすことにしてまず上京した。ちやうど胃腸を病んでいた私には『資本論』その他の書籍でふくれ上つて
先生と私のリュックを先生とこの扉まで持ち上げることは大変な努力であつた。今日でこそこの宿までバスが通い、ク
クシーが走っているが、そのときは大部分が徒歩であつた。クタクタになつてやつと宿までたどりついたが、それから
約一カ月の信州の夏の生活を今もたのしい思い出として心に残している。久しぶりの白米もうまく、山の味は格別であ
つた。

こう書くとのんびりした一カ月のように聞えるが、実はそうとばかりはいえなかつた。あれほど東奔西走され、忙が
しいお仕事を東京でされていた先生は扉につくやその翌朝からまさに判でおしたような変化のない生活に入られる。そ
のころ先生はちやうど『資本論』の翻訳の仕事をされていたときであるが、朝六時半に起床され、入浴。朝食までお仕
事、朝食後わずかの間休息雑談、それから中食までお仕事。そのあとと休息、散歩、ほんのわずかの仮眠、またお仕事。
夕食後しばらく休息雑談、そして十一時までお仕事、就寝。これが私の滞在の一カ月間つづいた。これが先生の扉での毎
日の生活なのであろう。そしていまも扉に行かれたら、これと同じ生活を送られるのであろう。私は福岡に帰つてか
ら、先生の規則正しい生活がある友人に語つたら「先生もえらいが、君も先生につきあつたんだからえらいよ」とほめ
られた。しかし私はただそうせざるをえなかつただけであつてほめられることはない。ただそのひと夏ほど『資本論』を
よく読んだ年はそれ以来なさそうである。それとともに、この先生との「雑談」のなかでうかがつた先生のお話しは、

私の心の糧となり、きわめて大きくその後の私の生活のなかに位置をしめている。価値論争に関心をもち出していた私はこの松本への車中から「人間の解剖は、猿の解剖の鍵である」とはどういうことなのかという質問をはじめ、当時私にわからぬながら最も感銘をうけた先生の二つの論文「歴史的法則について」と「政治と妥協」についてしきりに質問させていただいたことを記憶している。しかしそんなことばかりではなく、さらりとお話しになっていた先生の生い立ちの記など私には興味つきないものがあったのである。

私ごとになるが、もしこんな機会をもちえなかったならば、私の小さい人生もかなり変っていたかもしれない。貧乏のどん底にいた私は、ちようどそのころ友人からある就職をすすめられていたからである。

三

向坂先生のすばらしい蔵書については、いまさらのべることはあるまい。

ある人が「あれは先生の道楽さ」といったが、道楽とはけしからんし、まあ道楽としてもすばらしいものである。しかしこれだけの蔵書を集めになるには大変な努力を必要とする。たとえば The New American Cyclopaedia を買われたときの苦心とよるこびの物語「ある百科辞書について」(『疑い得る精神』所収)をみるとわかる。先生の面目躍如たるものがある。

実は私も先生と御一緒に古本屋めぐりをよくしたものである。たとえば福岡市だけにかぎってもたいした古本屋めぐりであった。健脚で散歩のお好きな先生は大学から天神町まで何キロかの道を歩くぐらい平気なのである。とくに戦

後の古本屋の数はおびただしかった。それが箱崎の店からはじまり、千代町、呉服町附近、天神町界隈、渡辺通りにまで及ぶのである。何度この偉大な散歩の同伴をしたことであろうか、いまはない小さな店のちりの中から『米欧回覧実記』全巻をさがし出されたのもこのころであった。

しかし玄人の先生は古本屋だけではすまない。古本屋のない地方の街に行かれると古道具屋を探される。そこには古道具と一緒に古本がもちこまれてくるからである。たしか唐津の古道具屋から中江兆民の『理学鉤玄』を発掘されてきたこともあったように思う。私がお伴をした古本屋めぐりは先生のこの散歩のほんの一部であろうが、私が知るかぎりでも、あげればまだまだある。

そういえば、近年は先生のこの道楽も少くなっているのではあるまいか。あまりにも御多忙な生活の連続だからであろう。ときには私たちもゆっくりと先生と古本屋めぐりをしたいものである。

四

ある日、至誠堂の出光氏が私のある友人の紹介状をもって突然拙宅に来られた。

はなしを聞くと、向坂先生の自伝をぜひお願いしたいが、私からも先生におすすぬめ願いたい、とのことであった。私それは無理でしょうと即座に答えた。その結論を出すのに、私にはなんの躊躇もなかった。その理由はきわめて簡単である。先生は青年であって、あと数十年たたないと、そんな気分になれないと思っただからである。

しかし出光氏から依頼されるままに先生のお宅を訪ねた。出光氏はこの用向きを先生に早速告げた。やはり先生の御

返事は想像通りだった。「あと二十年ほどたったら考えましよう」ということだった。出光氏は私に援軍をもとめられるが、私もいかんともしようがない。私自身もそう考えているからである。何度かの応酬があったが、はなしは一向に前進しない。

さすがの出光氏もついに断念して、このはなしはやめましようということになった。それから数時間世間はなしにはなをさかせて先生のお宅を辞去したが、このプランはしばらくして先生の文集『私の社会主義』として実現した。この書が実現したいきさつを私は知らない。しかしこれで出光氏の当初のプランも実現したわけであるうから、私にとってもまことにうれしいことであった。ことに先生の社会主義に関する主な論文がここにまとめられたことはなんとすもうれしいし、意義も深い。

この第一章には「人はなんのために生きるか——愚者の道——」という一文がおさめられている。このなかで先生はこういわれている。

「人は、自分はなんのために生きるか、よくわからないのではあるまいか。古人は、人の値うちは棺をおおうて、はじめて知るものであるといっているが、うまいことをいったものである。生きているうちは、他人にだってわからない。少くとも十分にはわからない。いわんや自分にわかるわけがない」

そして

「(しかし)歴史は、かならず、これら小さいの混乱やまちがいを整理して、偉大な人物には偉大な地位を与え、小人物には小さな地位を与える。現在どんな地位にあっても、またどんな高い位置を与えられていても、それが錯誤にもとづく場合には、歴史は、一定の時間のうち、これを遠慮えしやくもなく引き下ろして、それに相応の位置を与え

る。歴史はこの点でまったく公平である。……この点では、個人の虚栄心や願望などはみじめで、はかないものである。」

人生論などといえば、おきらいかもしれないが、先生が歴史の流れとそのなかの人間をみつめられる御意見である。『私の社会主義』は先生の近年の二つの文集『社会主義と自由』や『若き僚友の死』とともに、先生の理論を多くの読者に伝えたものであろうが、そのなかから先生の人々がにじみでている。